

# 「日本写真保存センター」調査活動報告(34)

—戦後日本の日常を撮った2人の記録—

松本 徳彦 (副会長)

戦後まもなく、米軍写真班だけでなくその家族も多数来日し、焼け野原だけでなく復興に汗水を流す日本人の逞しさが、彼らの目にどのように写ったかが数多く記録されている。日本人の勤勉さや親しみ、愛らしさが写真に写っており、親近感をもったようだ。また、農具市のような農家の年中行事では、子どもたちが主人公で、屈託のない笑顔とまなざしほど、いつ見ても記憶に残る一瞬である。写真は時代の鏡ともいわれる所以である。誰の目にも時代の記録ほど新鮮で興味深いものはない。

## ■市川市八幡神社・農具市 山崎美喜男

写真家協会の元会員の山崎美喜男さんから、自宅の物置にあった古い茶箱から「昭和三十六ぼろ市」と書かれたネガフィルムの束が見つかった。開けたところ酸っぱい匂いがしていたと連絡があった。山崎さんはビネガーシンドロームではと思い、写っている画像を確かめたところ葛飾八幡宮の農具市であることが分かった。当時の風俗や様々な衣装を着た人や服装など、歴史的・民俗学的資料として貴重だと判断して、山崎さんは元市川高等学校で教鞭をとっていた兄の山崎秀男に見せたところ、「これは郷土資料として役立つよ」と、残すことを勧められた。こうした経緯を経て、写真集『昭和三十六年市川市八幡神社 農具市』が出版された。(2020年10月)

写真集はB5判70頁で、写真(美喜男)34点と解説：山崎秀雄。農具市の歴史的考察が詳しく執筆されている。農具市の起源から縁日の露店の場割、地代、露店の配置図まで記され、歴史資料としても貴重なものとなっている。

撮影フィルムはわずか35ミリフィルム3本72コマであるが、移り変わる町々の家並みや伝統的な祭礼行事の記録として保存する価値があると判断し保存センターで収集することにした。

撮影者の山崎氏は1940(昭和15)年、千葉市八幡町で

生まれ、多摩芸術学園写真科を卒業。写真家杉村恒氏のアシスタントを務め、日本民芸や商業フォトの分野での活動が長い。日本写真家協会会友。

写真解説：①拝殿前の賑わい、②地球ゴマ原理のおもちゃ屋、③子供で賑わう金魚すくい屋、④さまざまな槌や土を固める工具類が並ぶ木工製品屋、⑤昔懐かしいカルメ焼き屋など、見ていて楽しい写真が多い。



①ぼろ市 拝殿前の賑わい



④ぼろ市 木工製品屋



②ぼろ市 地球ゴマ原理おもちゃ屋



③ぼろ市 金魚すくい屋



⑤ぼろ市 カルメ焼き屋

## ■戦後日本の暮らしを撮る

### エリザベス・ウォルシュ・オハラ

終戦から3年後の1948年に来日した米国籍の日系アメリカ人のエリザベス・ウォルシュ・オハラさんが撮影した、故郷の西宮市夙川地区を写した写真フィルムがお嬢さんのモーガン・オハラさんから、夙川自治会の夙寿会カメラクラブに届いた。開けたところ6×6判のハッセルブラッドで撮られたフィルムが140本も出てきた。自治会では西宮市に相談し、戦後間もなくの暮らしぶりや今はなくなった珍しい光景が数多く出てきた。そこには空襲から難を逃れた古い町々や近隣の農村や漁港で働く人たちから、農村風景や近郊の学校で写した子どもたちや運動する姿に近隣の人々などが、足を伸ばして京都の祇園祭や奈良の二月堂、宝塚歌劇場や文楽座などで写した写真、オハラさんがはじめて目にした日本の光景を、数多く写していた。そのフィルムを入手し、保存することにした。

フィルムフォルダーは多少黄ばみ、酸っぱい匂いもしているが、風通しの良い場所で酸味を取り除き、保存することにした。フィルムの現像処理もよく画像の痛

みもない状態だった。戦後の日本人の暮らしの一端を知ることが出来た。

敗戦した日本には、アメリカをはじめオーストラリアなど沢山の軍人が駐留軍として、1951年のサンフランシスコ講和条約締結まで駐留していた。

写真を撮ったオハラさんは1918年にサンフランシスコで生まれた。母は当地のインテリア・デコレーター、父はシスコのフェリービルの建築技師。オハラさんの夫はアメリカンプレジデント・ラインの神戸支店長として来日し、休日には夫妻で各地を旅し、写真を撮ったという。

モーガンさんは母の撮った写真を整理し、母の故郷夙川自治会とボストン美術館などに日本人の暮らしぶりを撮ったプリントを贈ったという。

今回の寄贈を受け収蔵したネガは、6×6モノクロ216本とネガカラー5本とアルバム4冊(755枚)でした。

写真は、1948年から54年までのもの約2000コマから選んだ。



奈良 二月堂



西宮の漁師たち



京都 祇園祭り



近隣の農家、家族総出で稲刈り



着物の着付け



淡路島で、人形浄瑠璃遣い